

第 76 回 大 会
キ リ ス ト 教 史 学 会
研 究 発 表 要 旨 集

日 時

2025 年 9 月 12 日 (金) • 13 日 (土)

会 場

龍谷大学 深草キャンパス 成就館

明治時代のキリスト教徒と仏教徒：どのように／どのような「対話」がなされたのか

星野靖二（国学院大学）

本報告は、明治時代、特に明治前期の日本において、キリスト教徒と仏教徒の間にどのような「対話」がなされたのかについて論じるものである。更に、その「対話」の内実の話に加えて、その「対話」がどのようになされたのか、即ち、どのような経緯や背景において可能になり、なされたものであったのか、という同時代的な文脈にも目を向けたい。

概観的に言えば、近世の日本においてキリスト教は禁教であったが、幕末に宣教師が（再）来日して本格的に（再）布教を開始し、明治初期には日本社会の中で、伝道活動を行う日本人キリスト教徒が可視化された存在として立ち現れるようになる。

この間、明治新政府が紆余曲折を経ながら新たな統治機構を確立しようとしたことは、言うまでもなくキリスト教に大きな影響を与えた。同時に、端的には神仏分離令に見られるように、仏教についても、近世におけるあり方をそのまま維持することができなくなった、ということが重要な背景となる。仏教徒の中には、キリスト教徒が伝道し、教会を形成していくのを横目で見ながら、仏教を新たな形で国家・社会の中に位置付けて語る必要性を感じた者もあったのである。

もちろん、その際に、近世以来の邪教觀が日本社会の中に存続していたことを前提とした上で、新興のキリスト教に対して警戒感を抱いた仏教徒も多くあり、中にはキリスト教を排撃することが仏教の存在意義であるとする者も出てくることになる。

このような文脈において、明治前期には仏教側から多くの「排耶論」的な議論がなされることになるが、そこで誤解や偏見をも含めて、どのようなキリスト教像が描かれていたのか、またキリスト教徒の活動がどのように捉えられていたのか、といったことを取り上げる。

かつ、こうした議論は必ずしも一方的・獨白的な論難でもなかった。仏教徒が、仏教はキリスト教よりも優れた宗教であると論じようとした一方で、キリスト教徒も、キリスト教は仏教よりも優れた宗教であるという弁証論を展開することになる。本報告では、このように相互に弁証論が交わされていた局面にも目を向け、これをある種の「対話」であると捉えて検討したい。

もちろん、それらは自らの奉じる宗教の弁証という目的においてなされた議論であったため、「対話」であるとしても、かみ合った、生産的な対話ではなかった、と見ることもできる。しかしながら、そうであったとしても、例えば何がより良い「宗教」であるのかといった事柄について、結果として論点が共有されていったことについても、近代日本における「宗教」概念の形成過程と関連させて述べる。

相互に『越境』しあう宗教間対話の可能性

那須英勝（龍谷大学 文学部）

- 真宗者・佛教徒として「キリスト教」をどう見ているか：
 - カール・バルトが「<源空・親鸞の浄土教>のなかに<真の宗教>（神の摂理による驚くべき並行事象 [striking parallelism]）」(*Church Dogmatics I-2, 340–344*)を見るように、「<キリスト教>のなかに<真の宗教>としての平行事象」を見ている。
- 対話についてどう考えているか
 - 高田信良氏の「バルト<神の名>論と親鸞<本願の名号>論」に示されるように、「それぞれが依拠する宗教的文脈が全く異なっているにもかかわらず、それぞれが「宗教の真実」として理解されうる（相互に響き合うような〈応答性〉が観取される）」（『京都ユダヤ思想』7 [2016], 139）のであり、キリスト教徒と真宗者・佛教徒が宗教間対話には大きな意義があると考える。
- 宗教間の対話における挑戦と可能性、また対話を進めるための戦略や方策について
 - 自らの信仰を説明するための宗教的概念や信仰を表す言葉のみを用いていては「相互に響き合うような〈応答性〉」を持った対話は成立し得ないであろう。
 - 宗教間対話の場においては、さらに一步踏み込んで、お互いが用いる宗教的概念や信仰表現についても、相互に「越境」しあうことを許容する態度で対話を進めることが必要ではないだろうか。
 - 以下「相互に<越境>しあう」ことの持つ可能性を示す例をいくつか挙げてみよう。

1. 戦国期のキリストンの説いた「後生のたすかり」の場としての「来世」
ハビアン著『妙貞問答』（16世紀中期）は妙貞（浄土宗尼僧）と幽貞（キリストン信徒）という二人の尼僧の問答形式で進行する。その下巻でハビアンがキリストン信仰の概要を述べられる部分では、キリストン教理書で用いられている佛教的な「後生のたすかり」という表現をもちいた救済論が説かれるが（東馬場郁生『キリストン史再考』[2006], 88–100）、ハビアンは妙貞と幽貞の間の（仮想）対話を成立させるために、さらに踏み込んで、キリストンの神を当時の日本人の佛教信仰に合わせて「現世安穏、後生善処の真の主」と表現している（『キリストン教理書』[1993] 386等）。
2. カール・バルト（1886–1968）が指摘したキリスト教と真宗信仰に見られる並行事象
カール・バルトが『教会教義学』で示した、日本の「浄土教（真宗）」信仰の中に「真の宗教」としてのキリスト教との並行事象を認める記述は、宗教間対話に関心のある真宗研究者に影響を与えた。
 - ❖ アルフレッド・ブルーム氏（Alfred Bloom 1926–2017）はアメリカの親鸞思想の学術研究の草分けとして知られ、加州バークレー市の神学大学院連合にも参加している米国佛教大学院の院長も務め、キリスト教・ユダヤ教・佛教の宗教間対話にも積極的に参加し、かつ篤信の真宗門徒としても知られている。このブルーム氏がハーバード大学に提出した学位論文（1963）に基づいて出版された著書*Shinran's Gospel of Pure Grace* (1965: 和訳『親鸞とその浄土教』[1983])の序文に、自身の親鸞思想研究の背景にバルトのキリスト教との並行事象を認める記述があったこと

を記している（vii）。また本書のタイトルにgospelやgraceという言葉が使われていることにも要注目。

- ❖ 星野元豊氏（1909–2001）は浄土真宗本願寺派の僧侶であり、龍谷大学学長も勤めた人物であるが、その学位論文に相当する著書『宗教の本質』（1967）において次のように述べている：

「わたくしはカール・バルトのキリスト教の解釈から多くのものを学び、キリスト教と浄土真宗とに本質的な同一性を見出した。全く異なった伝統と性格をもちながらも、両者は宗教としては、その純粋とも言いうるような本質構造を示し、その宗教としての本質構造においては全く同一である。」（62）

星野氏は、さらに同書の結論にあたる部分（182–206）では、キリスト教で、神と人との間の宥和媒介をする人であるイエス・キリストに対して用いられる「仲保者」という概念を、浄土教で説かれる阿弥陀仏とその浄土に適用し、浄土教の救済論で示される「聖から俗への方向性」として理解している（藤井大慎「真宗学における哲学的研究の一断面」『龍谷大学文学研究科紀要』38[2016, 128–132]等）。

- 現在はあまりポピュラーなアプローチではないかもしれないが、お互いが用いる宗教的概念や信仰表現について、相互に「越境」しあうことを許容する態度を共有することで「相互に響き合うような応答性」を持った宗教間対話の可能性が広がるのではないだろうか。

世俗化に直面した近代の宗教家 —トルストイと清沢満之について—

Bernat MARTI-OROVAL（早稲田大学）

本発表では、長寿を全うした著名なロシアの小説家・宗教家、レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ（一八二八～一九一〇）と、結核に苦しみ、40歳を迎える直前に逝去した日本の仏教家、清沢満之（一八六三～一九〇三）の思想を比較する。両者の思想が近代にもたらした世界観、特に世俗化に対してどのように応答しようとしたのかを分析することが目的である。

ロシア貴族の一員として生まれたトルストイに対し、清沢は在家の身分であり、経済的困難の中で学問を志し、浄土真宗大谷派の経済援助を受けてようやく得度した。世界的な名聲を博したトルストイとは異なり、清沢は生前、主として浄土真宗大谷派内でのみ評価され、死後も長らくその位置に留まっていた。近年になってようやく彼の思想は外部でも一定の注目を集めつつあり、現代日本において広く知られているとは未だ言いがたい。こうした両者間には、社会的背景や年齢差、文化の相違等が存在しているが、グローバル化が進んでいた時代背景を踏まえると、彼らの精神探求には顕著な共通点も見られることが発表で明らかになるであろう。

トルストイはロシアの名門伯爵家に生まれ、裕福な家庭に育ち、国際的に高い評価を受けた作家であったが、清沢と同様に苦難の道も歩んだ。幼少期から彼は、世俗化された宗教生活を漠然と送り、意識的に信仰を持っていた訳ではなく、日常に溶け込んだ宗教習慣に従っていたのみである。しかし、時代の精神や自らの人生の状況の影響で、その薄かった信仰心が大きく変化し、宗教的探究を始める事となる。宗教経験を通じて、庶民や農民の宗教的生活を再評価するようになったのである。トルストイの代表作である、『戦争と平和』（一八六九）、『アンナ・カレーニナ』（一八七三～七）等においては、社会の矛盾を描く一方、自らの精神探究を作品に反映させている。しかし、一八七九年以降、トルストイは宗教の探求に専念し、その最初の成果として、一八七九年から一八八二年にかけて『懺悔』を執筆した。本発表では、トルストイの『懺悔』に注目し、清沢の思想との共通点を探る。

清沢においても、トルストイと同様に近代の科学的世界観や世俗化に反発し、病を経験したことで、宗教の本質である宗教経験を通じて様々な悩みへの答えを見出そうとした。大学時代から清沢は科学的世界観を受け入れず、むしろ西洋哲学の觀念論的・合理的世界観に影響を受けていた。そのためか、（一）西洋の唯物論を論破しようとし、（二）仏教の教義を自ら立てた宗教哲学によって説明しようと試みた。しかし、病気や改革運動の挫折、さらには自身の思想の進展により、晩年に至ると彼は精神主義に転じ、宗教体験や神との関係に焦点を絞るようになった。清沢は明治初期から仏教界で議論の対象となった、西洋科学との整合性、仏教と西洋哲学との関係、仏教と道徳との関係を巡る問題について、いずれも表面的なことがらに過ぎず、眞の宗教探求は内面的な次元に集中するべきだと説いた。

トルストイと清沢の両者の思想には、しかしながら、明確な相違点も存在するため、発表ではその比較における「限界」についても言及する予定である。

天理教から見たキリスト教

東馬場郁生（天理大学）

本発表では、「天理教から見たキリスト教」について、（1）学術研究をとおしたキリスト教（カトリック教会）へのまなざしと、教団としての対話や集会への参加、（2）対話の当事者として見える課題、（3）課題の克服と宗教間対話のさらなる展開の提案、の3点を述べる。

（1）いくつかの個人的接触を除いて、天理教によるキリスト教への関心のきっかけは、昭和初期に始まるきりしたん版を中心とした近世カトリック東洋伝道史料の蒐集と研究にある。ただしその研究は宗教間対話として自覚されることはなかった。教団としてキリスト教との対話的関係が明確になったのは1986年、ローマ教皇の呼びかけによりアッシジで開催された「世界平和の祈りの集い」に参加したのが始まりである。以降、ローマ教皇庁や聖エジディオ共同体主催の諸宗教の集いや祈りの集会にはほぼ途切れなく代表を送ってきた。またグレゴリアン大学と天理大学の間で1998年（ローマ）と2002年（天理）に「天理教とキリスト教の対話」も行った。

（2）私は、2度のグレゴリアン大学との対話、3度の教皇庁主催の集会、2度の聖エジディオ共同体の集いに参加した。世界から集まった宗教者の中に身を置き対話する中で、なぜ他宗教との集会や対話の参加するのか、この意味は何だろうかと、いつも考えていた。天理教版の「諸宗教の神学」も試みたことがある。

現実の対話について課題は少なくない。例えば、一般論として、宗教教団が「だれでもの宗教間対話」を実践することは極めて困難であろう。教団を代表して宗教対話や集会に参加するのは概ね「他宗教との対話の担当者」であり、教団内の特定の人や部署に限定されることが多い。さらに、対話や集会で声高に唱えられる宗教間の対話や強調の必要性や意義が神社の氏子、寺院の檀家、各宗派の教会信徒に対し積極的に語られることは、他宗教との対話を教理や信条とする場合を除いて、ほとんどないと思われる。現実の宗教間対話は、その中のエリート的立場の者や神学・教學者が、時には教団を代表し、あるいは個人的関心から携わる、その場のサロンもしくは知的営みといえるかもしれない。

（3）宗教間対話は、結局、個人が行うものならば、実はその自覚が宗教間対話の現実的な発展を可能にするのではないだろうか。私は、かつてキリスト者に「なぜ天理教のあなたがきりしたんを研究するのか」とよく聞かれた。彼らにとって私は、いわば、きりしたんの研究を間に挟んだ宗教間対話の相手、つまり対話の向こう側にいる存在だった。近年ではその質問の頻度が減る一方で、天理の知人から「おまえは天理のかくれきりしたん」と言われることがある。かつて対話の向こうやこちらと思われていたのが、今では、ポジション・チェンジしたとみなされているのだろうか。

むろん信仰者としてのポジション・チェンジはない。むしろ、きりしたんを学びカトリック信仰を学ぶことで自己の個人的信仰はより徹底されたと感じている。そしてこれこそが宗教間対話と呼ぶにふさわしいものだと思う。ただしチェンジしたこともある。それは対話にかかる自他の概念である。対話は通常自己と他者を二分して考える。変わったのはこの自他の区別のとらえ方である。天理とカトリックの信仰は、信仰者と非信仰者との自他関係においては、共通性を持つ複数の自己として立つ。それは諸宗教の神学のいづれかの信仰の立ち位置からの包括主義的な共通性ではない。宗教あるいは信仰として、非宗教的な還元的解釈や言説に対峙する自律的で非還元的な意味で信仰を語る共通性である。

シンポジウム「キリスト教と諸宗教：対話の可能性と限界」

これからの宗教間対話を考えるとき、教団、宗教といった固定的な観念にもとづく自己と他者の枠組みをまず緩め、個人として主体的に目の前の宗教的他者に向き合うことが大切だ。ただし宗教間対話は自然発生するものではない。それを善きこと信じる者によって自発的に試みられねばならない。その者とは他宗教に触れ何らかの形でそれを評価できる人であり、その典型は、宗教的他者に出会った神学者や宗教研究者であろう。まずは他宗教に目を開く信仰ある研究者こそが、実のある宗教間対話を推進できるに違いない。

浄土真宗にとってのキリスト教

—遠藤周作『沈黙』と『歎異抄』を手がかりとして—

高田信良 senshin.takada@gmail.com

1. 遠藤周作『沈黙』と『歎異抄』—(問題意識) <浄土真宗とキリスト教は似ているか?>

『沈黙』と『歎異抄』、それぞれの、宗教文学としての独自の世界を、対比的に考察しようとするものではなく、「浄土真宗」と「キリスト教」、それぞれにおける〈信・救い〉を語る文脈を対話的に考察してみようというものです。

<浄土真宗とキリスト教は似ている(か?)>との問題意識は、少なからぬ人が持っているものです。が、<16世紀キリスト教の証言>が初めてのものだろうと思われます。

- 遠藤周作『沈黙』における《信・救い》(転んだロドリゴ/フェレイラのイエス/キリスト理解)が(私にとって)にすぎませんが)〈歎異抄ブーム〉・〈親鸞ブーム〉のなかで理解される<宗教における《信・救い》>として共鳴するものがあります。なによりも、『歎異抄』における「如来よりたまわりたる信心」「悪人正機」(悪人こそが救われる)という「ことがら」と共鳴するものがあります。

2. キリスト教が見た「浄土真宗」—<16世紀のキリスト教>

→ p.4 (小川論文)

一向宗はルターの宗派のようなもので、彼らが説くところによれば、人が救われるには阿弥陀の名を称える以外に必要なものはなく、已れの業によって自らを救うことができる^と考^えるのは阿弥陀に対する侮辱であり、救いはひたすら阿弥陀の功徳によるものである。

というように、一向宗とルターには類似性があるという認識が定着しているようである。

<一向宗はルターの宗派のようなもの>

- 一向宗(浄土真宗、親鸞の説く「念佛」)の特徴 阿弥陀の名を称える=救い 捉えている
※念佛=<本願他力との出会い>が<誤解されている>

☆念佛=<本願他力との出会い> に<得心がいかない人々：東国より親鸞をたずねている
[唯ただ念佛]

(『歎異抄』第2章)

(『歎異抄』における「如来よりたまわりたる信心」「悪人正機」(悪人こそが救われる))

「願力不思議の信心」(=大菩提心) [『浄土和讃』]

「阿弥陀の名を称える」・念佛=<本願のはたらき>(〈悪人〉を救うくはたらき)を戴いている
=信心

[唯ただ念佛]が、(ルター)sola fide(信のみによる)のようなもの、と理解している(のか?)・・・

→ p.6 『沈黙』「あとがき」

ロドリゴの最後の信仰はプロテスタンティズムに近いと思われるが、しかしこれは私の今の立場である。それによって受ける神学的な批判ももちろん承知しているが、どうにも仕方がない。

- ・(フロイス等の)「ルター派の理解」/(ルター)sola fide(信のみによる)

- ・遠藤周作の<プロテスタンティズム>理解、はたまた、(Calvin)sola gratia(恩寵のみによる)など

(16世紀キリスト教における<神学的議論の問題>について私は知りませんが、基督教の<信救い>と一向宗/浄土真宗の<信救い>が、<似ている/共鳴する>面があることに気づかれているのではないかと思います)

- <歎異抄ブーム>、<親鸞ブーム>、(倉田百三『出家とその弟子』など)

法然・親鸞などの時代から展開してきた伝統的な「浄土宗/浄土真宗」を明治期になって、宗教として見ていく/理解しようとする関心

□国分敬治『キリスト教と浄土真宗』（法藏館、1989年）

p.161「あとがき」：私は若いときから、パウロ『書簡』、アウグスチヌス『告白』、親鸞『歎異抄』を座右において読み続けてきました。その時々に、新しい感動にみたされて、「このわたし一人のために」書かれたものとして受けとることができるようになりました。ほんとうにありがたいことです。

p.50「パウロと親鸞」

わたしが親鸞の信仰について強い関心をもつようになったのは、倉田百三の『出家とその弟子』を読んでからのことです。当時（1916年）この作品については、さまざまな批評がなされました。そのうちでもわたしの記憶に残っているのは、「あの親鸞は法衣をまとったキリストだ」という批評です。この批評が妥当であるか否かについて、わたしは長年、考えつづけてきました。その手がかりとして、わたしは親鸞の信仰が如実に表明されている『歎異抄』とキリスト教の信仰が誠実に告白されているパウロの書簡集とをとりあげて、ささに調べてみるとしました。そうしてみると、親鸞の信仰とキリスト教徒としてのパウロの信仰が軌をおなじくしているのではないだろうかと考えるようになりました。

3. 私にとってのキリスト教—キリスト教における「宗教の神学」

—<20世紀のキリスト教—諸宗教のなかの宗教/基督教>

4. 私にとっての「浄土真宗」——「浄土真宗」は、「親鸞の仏教理解」——

遠藤周作『沈黙』：〈親が着せてくれた洋服〉が合いにくい、合わそうと苦心した。

（キリスト教という「合わない洋服」を捨てずに自分に合わせる努力をした）

親鸞：〈善導・法然が着せてくれた服（「称名念佛」「選択本願念佛」）には”ほころび”がある〉

明恵『摧邪輪』：法然『選択本願念佛集』（他力を教える）、「發菩提心」を欠くとの批判

〔親鸞〕否！そうではない、拯われる〔大菩提心がある〕

○「願力不思議の信心は 大菩提心なりければ

天地にみてる悪鬼神 みなことごとくおそるなり」（『浄土和讃』現世利益和讃 p.575）

「願力不思議の信心」・「如来よりたまわりたる信心」（『歎異抄』6）は、「大菩提心」に他ならない。

「念佛は、まことに淨土に生るるたねにてやはんべらん」（『歎異抄』2）

「本願を信じ念佛を申さば佛に成る」『歎異抄』12）、「念佛成佛是真宗」（善導）p.187）

〈教・行・証が整っている大乗至極の教え〉（きちんとした服）であると説明したのが『教行信証』。

『歎異抄』における「如来よりたまわりたる信心」「惡人正機」（悪人こそが救われる）という「ことがら」と共鳴するもの

大行・大信

a)「行巻」【1】つつしんで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは即ち無碍光如來の名を称するなり…しかるにこの行は大悲の願（第十七願）より出でたり。また諸仏称名の願と名づく、また諸仏咨嗟の願と名づく、また往相回向の願と名づくべし、また選択称名の願と名づくべきなり。

『浄土真宗聖典』註釈版（本願寺出版社、1988、2004 第二版）p.141

b)「信巻」【1】つつしんで往相の回向を案ずるに、大信あり。大信心は、すなはち、これ長生不死の神方、欣淨厭穢の妙術、選択回向の直心、利他深広の信楽、金剛不壞の真心、易往無人の淨信、心光攝護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷径、証大涅槃の真因、極速円融の白道、真如一実の信海なり。この心すなはちこれ念佛往生の願（第十八願）より出でたり。p.211

○（歎異抄）「惡人正機」（悪人こそが救いの目当てである）・「如来よりたまわりたる信心」

：「第十八願」の（親鸞）理解

○<佛を念すれば、淨土に生まれる（救われる）>

「本願」（四十八願） 「生因三願」[第十八願・第十九願・第二十願]

「三願真仮」（第十八願：真実の願、第十九願・第二十願：方便の願）

5. <仏教とキリスト教>・対話的関心について—（五）<仏教とキリスト教>—葛藤から対話へ—

6. 浄土真宗における「祈り／瞑想」ということがら

—キリスト教における神への語りかけとの出会いにおいて—

7. 宗教における<信・救い>の一考察

—バルト「神の名」論、親鸞「本願名号」論、ブーバー<根元語>—（『龍谷大学論集』486、H27.october）

キリスト教伝道と近代日本における子ども向け読み物の展開

柿本真代

拙著『児童雑誌の誕生』（文学通信、2023）は、近代日本において児童雑誌がどのように生まれ出されたかを国境を越えた書物・資金の流れに注目しつつ歴史的な視座から論じたものである。

これまで日本児童文学史においては、「キリスト教の〈信仰〉に基づくかまたはその〈精神〉に立脚して書かれた児童文学は、日本児童文学に重要な意味を持っている」（富田博之・上笙一郎・日本児童文学学会編『日本のキリスト教児童文学』国土社、1995）とされながらも、キリスト教が果たした具体的な役割は十分に明らかにされてこなかった。その要因のひとつとして、児童文学研究において児童文学らしい「創造性」や「芸術性」を重視するあまり、啓蒙的なもの、翻訳ものが軽視されてきたことが挙げられる。

一方、中国児童文学研究においては、宣教師らが紹介した西洋の児童文学作品が体系的にまとめられるだけでなく、翻訳を通した宣教師と中国知識人の協働によって「新しい子ども像」が構築されていったことなどが明らかにされている。

そこで本書では、キリスト教伝道に伴う書籍類の流通構造や資金の流れに注目しながら近代日本において子どものための読み物がどのように作られ、読者に届けられたか、そしてそれらが読者にどのように理解されたかを解明することを試みた。資料としては、おもに宣教師らの書簡類や手記、関連団体の年次報告を用いた。

序章・終章を除いた本書の章構成は以下のとおりである。

- 第1章 キリスト教伝道と子どもの読み物
- 第2章 児童雑誌の源流—『よろこばしきおとづれ』と日曜学校運動
- 第3章 児童雑誌の誕生—『ちゑのあけぼの』とキリスト教
- 第4章 児童雑誌の展開—『少年園』と西洋文化
- 第5章 児童雑誌の読書実態—『少年園』の書き入れをめぐって
- 第6章 読書する子どものイメージ—二宮金次郎の読書図を手掛かりに

この報告では、本書で注目したふたつの団体、米国聖教書類会社（American Tract Society）と外国日曜学校協会（Foreign Sunday School Association）について紹介しつつ、伝道に伴つて西洋の児童文学・児童雑誌がもたらされ、やがて日本人キリスト者らによって児童雑誌がつくられていく過程について第1章～3章の内容に基づいて論じたのち、本書で達成できなかつた課題について述べたい。

ヒュパティアとエウドキア—分断と対立を超える古代末期の女性たち

氏名 足立広明

所属 奈良大学文学部史学科

ユダヤ人を襲撃する修道士と暴徒を抑えるために総督は部隊を派遣したが、衝突が生じて死傷者が出た。キリスト教徒の群衆はさらに激高し、総督の背後で入れ知恵をしているのはあの女だということで、彼女の邸宅を取り囲んだ—古代末期のアレクサンドリアの女性哲学者ヒュパティアのことを思い浮かべる向きもあるだろう。だが、この既視感のある事件は 415 年の彼女の悲劇的な死から数十年後、キリスト教の聖なる都として整備されつつあったエルサレムで起こったことで、襲撃されたのはこの地に隠遁していた皇后エウドキアである。彼女はエルサレム巡礼を妨害されるユダヤ人のうつたえを聞き入れたのだが、それが砂漠の修道士バルサウマなどの激高を招くこととなってしまったのである。

近年、ヒュパティア研究は非常に進展している。彼女は啓蒙主義時代以来無知蒙昧なキリスト教暴徒とそれを唆したアレクサンドリア総主教キュリロスの犠牲となった「異教」最後の知識人として注目されてきた。しかし、近年ではこうした二項対立的な見方はマリア・ジエルスカやエドワード・ワッツらの研究でほぼ克服されたと言ってよい。彼女は 4 世紀末のアレクサンドリア図書館へのキリスト教徒の襲撃事件以降に、キリスト教と共に存しながら、キリスト教徒も含めた多くの弟子を育てることでその地位を上昇させた。対立は宗教的というよりも当時の党派的な政治対立のなかで生じたというのが現在の共通認識である。

しかし、報告者はこれらの近年の研究はなお不十分であると考えている。それはヒュパティアが同時代のキリスト教の女性宗教者と非常に近い特徴を持っている点がまだ十分に考察されていないという点である。ヒュパティアと同時代には、小メラニアやアニキウス家の女性たちなど西方元老院家系の有力な女性たちをはじめ、東方でもカパドキア教父の姉マクリナやコンスタンティノープルのオリュンピアスなど、その宗教生活を通じて社会的に大きな影響力を持つ女性が数多く輩出していた。なかでも冒頭に挙げた皇后エウドキアは、哲学者の父から古典教養を受けられて育ち、「異教」とキリスト教を横断する著作で人々に影響を与え、ユダヤ人問題でキリスト教修道士と対立するなど、共通するライフコースをたどっている。そして、ヒュパティアはその思想を伝える著作を残すことはできなかったが、エウドキアは『殉教者キュプリアノス伝』と『ホメロス風聖書物語』の 2 作のほかハマト・ガデルの浴場碑文など、我々に大きな手掛かりを残している。そこには、「異教」かキリスト教かではなく、いずれの宗教も横断する変化—すなわち伝統的な都市の儀式で結ばれた社会から、普遍的な絶対者を想定する古代末期の宗教風潮—のなかで、新しい自己を探求しようとする女性の姿が見いだされるのである。

ヘンリ 2世のヨーロッパ大陸領における教会政策とアンジュー帝国の平和

氏名 小野賢一

所属 愛知大学文学部

ヨーロッパ中世の平和運動については 11 世紀に南西フランスで展開された神の平和 Pax Dei がよく知られている一方で、12 世紀半ば以降のフランス西部の平和運動については十分に研究されていない。というのも、12 世紀後半のフランス西部は、イングランド王がフランス王国の西側を領有して成立したアンジュー帝国に組み込まれたため、近代国民国家のイギリス史やフランス史の枠組みの中にフランス西部を位置づけることが困難であったからである。従来の研究で看過されてきた 12 世紀後半のフランス西部の平和運動について明らかにすることが本研究発表の目的である。

具体的な事例として 1174 年のイングランド国王ヘンリ 2世によるカンタベリ大司教トマス・ベケットの墓前での贖罪を取り上げたい。この事例は教会史では聖俗の対立と教会の自由の典型的な事例として紹介されることが多い。ヘンリの贖罪に対するそのような言説が形成されたのは、『トマス・ベケット伝』諸版が後世に与えた影響によるところが大きい。この聖人伝史料群の最初の編纂者は中世の人文主義者として有名なソールズベリのジョンだが、彼の聖人伝にはヘンリ贖罪の記述はない。続いてエドワード・グリムが聖人伝を編纂し、そのなかではじめてヘンリ贖罪の記述があらわれる。叙述史料である以上、聖人伝には編纂者による脚色が含まれるのが常であるが、ヘンリとグリムの人間関係から考えると、グリムはヘンリを貶めるために叙述したのではなく、むしろ逆にヘンリを贖罪の聖史劇の主役の如く描いたとさえいえる。聖人伝史料だけでなく書簡史料で補って考察するならば、ヘンリを、カロリング期の君主による公的贖罪の儀礼に倣い、聖人崇敬と贖罪を通じてトマスの平和を実現した立役者と看做すこともできるのである。ボシャムのハーバートの如き一部の人々によるヘンリに対する敵愾心が後世にさらに誇張されて、グリムの意図に反して曲解されて暴君ヘンリというイメージが形成されたといってよい。

11 世紀の各領邦では、局地的な影響力を持つ狭い崇敬圏を形成する聖人が統合と平和の象徴としての機能を担っていた。アンジュー帝国はその成立当初、それらの領邦全体を統合する象徴としての聖人を有していなかった。エドワード証聖王は教皇によって列聖されたが、その崇敬圏はアングロ・ノルマン王国の内部に限られた。このように狭い崇敬圏だとアンジュー帝国全体の統合の象徴にはなりえなかった。1173 年のアンジュー帝国全土の諸侯たちの反乱に際して、これを領域横断的に鎮静化させることのできる統合の象徴が必要とされた。それがトマス・ベケットであった。

本研究ではトマスが英仏にまたがる広大な崇敬圏を有する聖人として認知されていたことを明らかにし、イングランドの聖人であるにとどまらず、複合国家アンジュー帝国の統合と平和の象徴としての機能を有していたことを明らかにしたい。

1520 年代のレジナルド・ポールとニッコロ・レオニコ・トメオ ——書簡からの一考察——

氏名 石川雄一
所属 上智大学中世思想研究所

スターキー(Thomas Starkey)やラプセット(Thomas Lupset)らパドヴァ大学に留学していた英国人が形成した国民団(natio)は、人文学者ニッコロ・レオニコ・トメオ(Niccolò Leonico Tomeo)と密接な関係を築いていた。その証拠として、ヴァティカン図書館に所蔵されているレオニコの書簡写本(*MS Rossianus 997*)には、英国人留学生宛の書簡が多数収められている。中でも、1520 年代にパドヴァ大学で学究生活を送り、同大学における英国人国民団の中心的存在であったレジナルド・ポール(Reginald Pole)との交際は特筆に値する。後にトリエンティ公会議の議長を務め、メアリ 1 世(Mary I)のカトリック復興において指導的役割を果たしたポールの思想形成に、レオニコが一定の影響を及ぼしたと考えられるためである。マイヤー(Thomas F. Mayer)編纂の『レジナルド・ポール書簡集』(*The Correspondence of Reginald Pole*)に収められた 1520 年代前半の多くの手紙がレオニコと関連していることからも、両者が親密であったことを窺い知ることができる。しかし、両者は常に良好な師弟の友情で結ばれていたわけではない。

16 世紀の人文学者たちは頻繁な書簡交換を通じて、国境を越えた知的共同体を形成していた。すなわち、後に「学問の共和国」(respublica literaria)と呼称されることになる人文学者たちの知的共同体において、書簡のやり取りは不可欠な役割を果たしていたのである。ポールもまた他の人文学者と同様に多くの往復書簡を交わしたもの、手紙の返送を怠ることが度々あり、その点についてレオニコから厳しい批判を受けている。

本発表では、未邦訳のレオニコとポールの書簡を中心資料として、1520 年代における両者の関係を検討する。特に本研究では、哲学や神学といった知的対話よりも、これまで十分に論じられてこなかった両者の私的交流に焦点を当てる。これにより、哲学史の文脈で関心が高まっているレオニコの人間的側面が明らかになると同時に、思想的・人格的成熟期におけるポールについての理解を深めることができる。また、20 代のポールが指摘されながらも改めなかつた粗略な性格が、後年における彼の政治的・宗教的活動の一部に影を落とす要因となった可能性についても考察を加える。

トランシルヴァニアのダーヴィッド・フェレンツによる 宗教改革についての一考察

氏名 伊勢田奈緒

目的 ダーヴィット・フェレンツ（1520-1579）はヤン・フス（1369-1415）と共に、東欧での教会創設者として知られる。彼は1568年、トランシルヴァニアで、ユニテリアン教会を創設したが、併せて、ハンガリー貴族、ザクセン人、セーケイ人の三国民同盟が信教の自由を認めるトルダ勅令を発布することに尽力した功績は見逃せない。しかしながら、彼は初めから、教会の創設や宗教の寛容を認めることを目指したとは言いがたい。彼は、ヴィッテンベルクとフランクフルト・アン・デア・オーデルでカトリック神学を学び、最初はローマ・カトリックの司祭に叙階された。後にルター派の牧師となり、トランシルヴァニアのカルヴァン派の牧師となった。こうして、キリスト教の神学者としてのキャリアを通して、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の教えと実践を学んでいった。後に彼はそれぞれの宗派の解釈をいくつか拒絶していく、最後にユニテリアン主義を受け入れた。トルダ勅令は個人の信教の自由は認めていなかったが、各地域はどの宗派の牧師を自分たちが擁するか自由に決めて良いという内容が記され、自らの信仰を他宗派から否定されずに守ることができるものであった。このような信仰寛容の発想は、ダーヴィッド自身の信仰の遍歴が重要な鍵となっていると考える。彼自身が、個人的な信仰の自由を得ることを求めていたのではないか、また、はじめ反三位一体論に対して反論していた彼が三位一体の神学に異論を唱えるようになったことも宗教の寛容と関係しているのではないかと考える。発表ではキリスト教の神についてあくなく追究をしつつ、トランシルヴァニアにおける彼の描く宗教改革のために、古い教義を破壊し、それを新しい教義に置き換えることに全生涯を捧げたダーヴィッド・フェレンツについて考察したい。

学術的背景 日本ではダーヴィッド・フェレンツについての学術的な論文は見当たらない。ただ、ユニテリアン教会を設立した人物としての紹介されている程度である。海外論文では、トルダ勅令に関する箇所やトランシルヴァニアでの宗教改革での記事に、彼が必ず、取り上げられているが、彼の信仰遍歴と宗教寛容の関係を扱ったものはない。

学術的意義 ヨーロッパ各地で「真の宗教」を求めてのカトリックとプロテスタントの宗教戦争が絶えなかった時期に、トランシルヴァニアが宗教的寛容を行ったことを考察することは意義のあることだと考える。

文献表

William Toth,Trinitarianism versus Antitrinitarianism in the Hungarian Reformation,Church history Vol.13 No.4, 1944, pp. 255-268

Gerald Charles Tilley,Efforts to Reform the Church in Hungary & Poland, California Biblical U.P.,2022

Andrew Pettegree, Alastair Duke, and Gillian Lewis(ed.),Calvinism in Europe 1540-1620, Cambridge, 1994

Howard Louthan, Graeme Murdock(ed.), A Companion to the Reformation in Central Europe, Leiden,2015

Peèer Katalin, Hitújítók és Hitvèddök, Kossuth, 1993

Alexander Sándor Unghváry, The Hungarian Protestant Reformation in the Sixteenth Century under the Ottoman Impact, Lewison,1989

メソジスト創立期における「愛餐（Love Feast）」の実践

氏名 阿部頌栄

所属 東北学院大学文学研究科ヨーロッパ文化史専攻 博士後期課程

1、研究の目的または研究で明らかにすること

メソジスト教会は、アメリカ独立戦争に続く 1784 年の「クリスマス年会」で英國国教会から独立し、独自の教派としての歩みを始めた。この時代はアメリカが新しい国として開拓、発展を進める時期でもあった。メソジスト教会は各地への巡回説教者の派遣、「組会」の組織と活動、そして「四半期会（Quarterly Meeting）」の開催などを行い、活動、展開を進めた。

これらの活動の中で特徴的な実践がある。「愛餐（Love Feast）」である。これは聖礼典として強調され行われていた聖餐とは異なり、パンによる食事と水によって行われるものであった。出席者相互の交流を図るためのものであった。

この実践がどのようなルーツを持つものか。創立期のメソジスト監督教会の中でどのように実践されていたのか。そこで共有された意味は何か。そしてなぜこの「愛餐」が行われなくなったのか。このことを検討するために、従来参考にされていたフランク・ベイカーの研究で言及されることがなかった、フランシス・アズベリーの活動、アメリカにおけるメソジスト教会の働きから考察する。

2、従来の研究と異なる点（考察の視点・新資料の利用）

一次資料

- Asbury, Francis, *The Journal and Letters of Francis Asbury* vol. 1-3., Epworth Press, 1958.

二次資料

- Baker, Frank, *Methodism and the Love Feast*, Epworth Press, 1967.
- Baker, Frank, *From Wesley to Asbury: studies in early American Methodism*, Duke Univ. Pr., 1976.
- Wigger, John, *American Saint: Francis Asbury and the Methodists*, Oxford University Press, 2012.
- Parkes, William, 'Watchnight, Covenant Service, and the Love-Feast in Early British Methodism', *Wesleyan Theological Journal*, 32-2, 1997.
- Ruth, Lester, 'Little Heaven Below: The Love Feaast and Lord's Supper in Early American Methodism', *Wesleyan Theological Journal*, 32-2, 1997.
- 深町正信「メソジスト信仰運動の愛餐をめぐって」『ウェスレー・メソジスト研究』第 10 号、2010 年、31-45 頁。

エデッサのヤコブの神秘主義思想とソロヴィヨフ靈性への影響 —シリア・キリスト教神秘主義の思想史的系譜

氏名 山崎あすか
所属 清泉女子大学大学院

1. 研究の目的または研究で明らかにすること

本研究は、7-8世紀のエデッサのヤコブ (Jacob of Edessa, c.640–708) が、ギリシア化の影響を受けたシリア教会において、シリア語本来の靈性伝統への回帰を主導し、その神秘主義思想が19世紀ロシアの哲学者ソロヴィヨフの思想に影響を与えた可能性を検討する。エデッサのヤコブは、古シリア語訳聖書への回帰運動の中核的人物として聖書校訂事業を主導する一方、創世記註解において天地創造を宇宙的愛の神学として解釈し、偽ディオニュシオス・アレオパギテスの「全被造物による神への贊美」思想をシリア的文脈で再構築した。特に、理性的思考と感情的直観を統合する彼の神学的方法論が、14世紀ペルシア神秘主義詩人ハーフィズの詩的靈性を媒介として、19世紀にハーフィズ詩に深く傾倒したソロヴィヨフの「愛と美を中心とした宇宙的調和」の思想に至る連続性を明らかにする。

2. 従来の研究と異なる点

考察の視点の革新性：従来のエデッサのヤコブ研究は、主として文献学的観点から彼のペシッタ（シリア語聖書の標準訳）聖書校訂作業に焦点を当ててきた。しかし本研究は、彼を単なる聖書学者ではなく、ギリシア化に対抗してシリア・キリスト教固有の靈性を復興・完成させた神秘主義思想家として再評価する。特に、アリストテレス自然哲学と偽ディオニュシオス神学を統合した彼の創世記解釈における理性と感情の調和的統合に注目し、これがシリア・キリスト教の言語神学的特質を示すものとして分析する。

史料の総合的活用：エデッサのヤコブの現存する断片的史料（『ヘクサエメロン』断片、書簡集等）を総合的に検討し、従来個別に研究されてきた彼の聖書学的業績と神学的思想を統合的に分析する。また、井筒俊彦の比較神秘主義研究の方法論を援用し、シリア・キリスト教神秘主義の東方への影響という新たな研究視角を提示する。

思想史的連続性の検討：エデッサのヤコブが復興・完成させた「理性と感情を統合した宇宙的愛による全被造物の調和」というシリア的神学的ビジョンが、東方キリスト教からペルシア神秘主義（特にハーフィズ）を経てソロヴィヨフに至る靈性系譜において、どのように継承・変容されたかを具体的に追跡する。これにより、東方キリスト教神秘主義の思想史的展開という、キリスト教史研究において新たな視座を提供する。

服部章蔵と山口県における『教育と宗教の衝突』の影響

氏名 小前ひろみ
所属 大正大学大学院

服部章蔵（1848-1916）は日本プロテスタント草創期の牧師であるが、帝国大学哲学科教授の井上哲次郎（1856-1944）から『教育と宗教の衝突』（1893）文中において親不孝な牧師と批判をされた。この批判は服部の活動に影響を与えたと考えられる。本発表は服部の位置づけをし直した上で、井上の言説の検証をおこない、批判が与えた服部への影響を探ることを目的とする。

服部は山口県吉敷の藩校・憲章館の創設者子孫として生まれ、幕末には長州藩士として武勲を立てた。明治維新後は東京で英学を学び、海軍兵学校の教官となるが、1876年にディビッド・タムソン（David Thompson、1835-1915）より受洗し、同年に按手礼を受け、教授職を辞して伝道活動に入った。山口県・広島県での伝道と教会設立、教会の独立自給、教派合同発議などの活動をし、梅光女学院の前身となる山口英和女学校（後の光城女学院）を設立など、女子教育にも尽力した。

吉敷出身の「3人のクリスチャン」として、成瀬仁蔵（1858-1919）、沢山保羅（1852-1887）と服部が挙げられるが、服部の知名度は他の二人に比して低い印象がある。その一因と考えられるのが、井上の論文である。井上は同論文で、キリスト教批判の論拠に内村鑑三不敬事件（1891）などの具体例を挙げた。そのひとつとして、服部が母親を回心させようとして重病に追い込んだと記述している。この記述は、浄土真宗本願寺派・島地黙雷らの令知會が発行した『三寶叢誌』105号（1892）に載った記事を、井上が真偽を確認すること無く転載した。内容は事実誤認や誤記を伴っていた。同論文は新聞や雑誌に掲載され、ほどなく書籍刊行に至る。同論の主眼は教育勅語と天皇制国家理念尊重に対峙するキリスト教への批判であり、キリスト教側からの反論を加えて一大論争となり、顛末の検証本が出るほどであった。その内容から鑑みれば服部批判は小さなものではある。しかし名指しされた当人への影響は、同じく名指しされた内村鑑三ほどでは無いにしても、けして少なくなかったのではないだろうか。

服部を学術的に述べた栗原千鶴の「服部章蔵と中国地方伝道」（1972）や、服部が創設して牧師を務めた『山口教会百年史』（1981）ではこの件に触れていない。山口教会の研究会が著した『服部章蔵の生涯』（1998）では井上の記述の検証を行い、寺田芳徳は『海軍兵学校英学文献資料の研究』（2013）で服部の心理的ダメージを指摘している。しかし、この批判がもたらした影響が具体的にどうであったのかは研究されていない。

本発表では、先行研究などから服部の業績を再びあとづけ、その上で、山口県の地域資料、学友会誌など、先行研究では触れられなかった出版物を用いて、服部への批判の影響を考察する。

宣教師アーサー・ロイドの仏教観——大乗非仏説か仏説か

氏名 黄イエレム
所属 日本学術振興会特別研究員 PD

19世紀から20世紀初頭にかけて、プロテスタント宣教師たちはアジア諸地域において仏教研究を進めた。西洋における初期の仏教研究は、当初インド学の一分野として出発し、東南アジアにおける植民地支配の拡大に伴い、南伝仏教（上座部/小乗仏教）の研究を中心に展開された。しかし、アヘン戦争および明治維新以後、来華・来日宣教師らによる漢訳仏典の研究がそれぞれ進展し、中国や日本の北伝仏教研究が本格化し始めた。代表的なプロテスタント宣教師の仏教研究者は、中国派遣のJ. エドキンズ、E. アイテル、T. リチャード、日本派遣のM.L. ゴードンやA. ロイドらである。

北伝仏教研究が深化する中で、宣教師たちは南伝仏教と北伝仏教の教義的差異を強く意識するようになった。すなわち、スリランカを中心とする上座部仏教が釈迦本来の教えに近いとされる一方で、阿弥陀仏への信仰を中心とする浄土宗・真宗などの大乗仏教は、釈尊の原始的教えから逸脱したものと見なされ、「大乗非仏説論」が宣教師間で広く共有されるようになった。

日本の真宗觀に着目してロイドの仏教観を分析した春近敬の先行研究（2010）においても、ロイドが仏教とキリスト教の救済論的共通性を強調する背景には、当時支配的であった大乗非仏説の理解があったことが論証されている。春近の研究がロイドの真宗理解に重点を置いているのに対し、本研究ではロイドの仏教関連著作を広く通覧し、彼の大乗仏教に対する評価が大乗非仏説に立脚していたのか、それとも大乗仏説を支持していたのかを再検討する。

ロイドは初期の論考において、阿弥陀仏信仰とキリスト教の救済論との類似性を積極的に認めつつ、その信仰形態を釈尊に由来する正統な仏教教義として評価していた。こうした姿勢は、当時の宣教師の中では特異であり、大乗仏説に一定の支持を与える立場と考えられる。しかし、日本における仏教研究の深化に伴い、ロイドは仏教教理の中にキリスト教的影響の痕跡を見出すようになり、その関心は釈迦とユダヤ教預言者の思想的接点、エッセネ派及びネストリウス派との関係、使徒トマスの東方宣教の影響さらにはマニ教における宗教的混合性などにまで及んだ。本研究は、ロイドが仏教とキリスト教の一一致を志向する「仏耶一元論」へと思想的に接近していった過程に着目しつつ、彼がいかにして大乗仏説と大乗非仏説という相反する二説を併存させ得たのかを考察するものである。

斎藤宗次郎の『愛の朱線』による内村鑑三の世界に対する関心と伝道

氏名 廖 本恩（リョウ ベンエン）

所属 （香港）中国神学研究院 中国文化研究センター研究員（ボランティア）・予備教員
NPO 法人今井館教友会 資料係 ボランティア

本発表では、斎藤宗次郎が制作し、無教会主義者の内村鑑三が使用した地図の写しである『愛の朱線』を紹介する。

無教会主義を唱えた内村鑑三は、長い間、宣教師に反対した爱国的な日本のキリスト教思想家と認識されてきた。しかし実際には、内村は自分が宣教師の敵ではないと繰り返し述べていたし、1922年10月には、彼の伝道雑誌『聖書之研究』に読者会「世界伝道協賛会」を設立し、有名な伝道会社であるCIM（支那内地伝道会社、内地会）を含む世界中の宣教師をその献金で支援していた。

内村が「世界伝道協賛会」を設立した理由のひとつは、青年時代から抱いていた世界への関心を反映させるためだったと考えられる。世界伝道協賛会設立の半年前、内村は丸善書店で新刊の「世界地図」（Cassell's New Atlas）を購入した。その地図には、内村の晩年の世界に対する関心を反映して、赤ペンで多くのメモやマークが付けられていた。このことは内村の日記に記されており（『内村鑑三全集』岩波書店版、34:28）、またこの地図は弟子の斎藤宗次郎によってICUの内村鑑三文庫に寄贈された。

上記のICU内村鑑三文庫所蔵「世界地図」という史料には、冒頭に斎藤宗次郎のノートが添えられている。このノートには、「世界地図」の由来、作成経緯、内村が記した地図上の地名をすべて斎藤が写し、『愛の朱線』を作成したことなどが記されている。しかし、『愛の朱線』の原稿（現物）は発見されておらず、それに関する情報もほとんどない。

今年、無教会主義の教友会である今井館の資料係が、ある作業中に書庫にこの史料『愛の朱線』を再発見した。この史料は、斎藤宗次郎が優れた絵の技術で、地図と内村がつけた613点のマーク（552点の線、38点の×、23点の記述）、そしてその筆跡を真似し、マークの一覧表を作成したものである。更に、この史料を手がかりに、未出版の斎藤の日記『二荊自叙伝』（未出版、今井館所蔵、1935-1937）と照らし合わせることによって、この『愛の朱線』制作の経緯が判明した。

本発表では、再発見された『愛の朱線』という史料を取り上げ、その史料の制作過程、ICU内村鑑三文庫所蔵の例の「世界地図」との関連に加えて、この史料に「世界伝道協賛会」の活動の一端や内村の世界観がどのように示されているかを考察し、従来の内村像の再検討を試みる。

灯台社の「国体変革」—「ハルマゲドン」と「神の国」を中心に

氏名 川口葉子
所属 明治学院大学キリスト教研究所

本発表は、1939年6月、治安維持法による一斉検挙から始まる灯台社事件に焦点を当てる。拙稿「治安維持法によるキリスト教弾圧—灯台社から続く「再臨」の問題を中心に」(『キリスト教史学』78号、2024年)は、当局が捉えた灯台社の終末観が続くキリスト教弾圧へと引き継がれたことを検討したが、その観点から、キリスト教弾圧の嚆矢として灯台社事件を捉えるものである。

「抵抗」者として捉えられ、彼らの意に反してその教義が「国体変革」と結びつけられたとみなされてきた灯台社について、どのように「国体変革」として理解されたのかを読み直し、当局が問題とした点について改めて検討する。

宗教弾圧における灯台社

1935年の第二次大本事件から始まる治安維持法による宗教弾圧は、新興仏教青年同盟、天理本道などを経て灯台社へと向かった。それらと同じく灯台社は主要な「類似宗教」とみなされており、治安維持法第一条「国体ヲ変革」する結社とされることになる。

灯台社の検挙と「国体変革」

灯台社は、いくつかの小さな検挙や1933年の千葉県特高課による不敬罪での取調べを経て、1937年の事変勃発後より本格的な取り締まりに向かって内偵が開始されていく。1939年1月、明石順三の長男真人らの銃器返納事件が起ったことで、急遽抜本的検挙に向かうこととなり、6月21日の一斉検挙へと至った。

検挙にあたり、当局は灯台社の目的について、キリストの再臨による地上「神の国」の建設と理解し、現存国家社会の組織制度の撃滅を企図するものとした。内偵段階で作成された「灯台社治安維持法違反並不敬事件概要」(「日本共産党関西グループ関係資料」所収、東京大学社会科学研究所所蔵)では、この「神の国」は、「神の国」と称する基督教的共産社会」とされ、『社会運動の状況』(1939年)でも、「共産的世界一元国家、即ち地上神の国」とされている。

当局が検挙当初捉えていた国体変革の手段とは、灯台社の思想信仰を宣伝することで教勢を拡大し、各国家社会の内乱紛擾等を誘発させて自壊へと導き、灯台社の独裁による共産的世界一元国家である神の国を建設するというものであった。さらに、「ハルマゲドンなる一大殺戮戦(...)即ち宗教的暴力革命」に至る可能性を捉えている。ただし、『特高月報』(1939年6月分)では、それが直接行動を意味するかどうかは疑惑があるとし、取調べによって解明することも述べられている。

取調べを経て、ハルマゲドンは「大災禍」であり、現存の国家統治組織を撃滅一掃するものと捉えられ、「国体変革」とは、証言宣言行為とハルマゲドンによって世界各国の支配体制を変革し、「地上神の国」を実現することとされていく。さらに、第二審判決では天皇統治に言及していくようになる。

検挙、取調べを経て確立していく灯台社の「国体変革」について、まずはその意味するものを理解し、続くキリスト教弾圧につながる問題として考えるものである。

布施辰治の戯曲草稿「弁護」第二場について

氏名 川上直哉

所属 仙台白百合女子大学カトリック研究所

今年、石巻市博物館は布施辰治の戯曲草稿「弁護」の第二幕を資料館の中から発見し、翻刻した。本発表は、昨年までの研究成果を振り返りつつ、この新史料の内容を検討する。

「今・ここ」におけるキリスト教・教会の展望を得るために、発表者は「教会の外にいるキリスト者」に注目すべきであると考えている。「教会の外」にいるキリスト者を探す際、「地域史」的な探索を必要とする。発表者は自らの住む地域（石巻）をフィールドとして「布施辰治（1880-1953）」「鴨田雄次郎（1901-1984）」「菊田昇（1926 - 1991）」に一つの系譜を見出し、その背後に「キリストン」の存在を見て、「今・ここ」の宣教・伝道に接続しようとしている。

ロシア正教の神学生として歩み出し、すぐに教会と衝突して離脱した布施辰治は、「教会の外」にいるキリスト者として生きつつ、1930年代には厳しい宗教批判を展開した後、1939年に獄中で「教会の中のキリスト教」と再会し、自らの信仰を戯曲に表現した。それが戯曲草稿「弁護」である。この戯曲草稿に表現された布施辰治のキリスト教の内容とその限界を、昨年度、発表者は明らかにした。その際、資料となる戯曲草稿「弁護」（「草稿『弁護』」）は、その「第一場」と、戯曲の構想を記した手書き草稿（「構想『脚本弁護』」）のみであった。「構想『脚本弁護』」によると、「草稿『弁護』」は「第一場」から「第八場」をもって構成される構想であった。

発表者が研究を論文と学会発表に纏め終わった頃、石巻市博物館学芸員が「草稿『弁護』」第二場を資料館の中から発見し、翻刻した。そこには、前半に布施辰治による①植民地主義批判、②「一視同仁」スローガン批判、③宗教批判、④治安維持法批判、が記されており、後半にオスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』を思わせるヨハネの処刑場面が記されている。

本発表は、以上の事項を整理・批評し、布施辰治のキリスト教理解の検討を深めるものである。

沖野岩三郎における平田篤胤のキリスト教摂取 ——関根文之助との比較を通して

氏名 藤原直美
所属 東京大学大学院

沖野岩三郎（1876–1956）は、牧師・小説家・文筆家として知られる。アジア太平洋戦争期には（狭義の）日本のキリスト教が興隆し、論者の間ではよく平田篤胤のキリスト教摂取が援用されていた。そのただ中である1943年に、沖野は『平田篤胤とその時代』を上梓したが、篤胤のキリスト教摂取を抑制的に捉え、その著作も批判的に読解した。こうした姿勢の背景には、沖野が明治学院在学中に聴講した久米邦武の連続講義の影響が大きかったと考えられる。沖野は牧師から文筆家に転身し、生涯にわたり日本古代史や神道を研究したが、日本的なもの（神道や国学、天皇や皇室）とキリスト教との、拙速な接合を試みなかった。日本的キリスト教の論者一人ではあったが、穩健な立場を保ち続けたのである。

例えば沖野は、篤胤の『本教外篇』に見られるキリスト教的要素について、村岡典嗣の研究や比屋根安定の補足を用いて慎重に論じた。キリスト教摂取の事実を否定せず、篤胤の特異性を認めつつも、それを過剰に評価して国学とキリスト教の歴史的な一致を強調しようとはしなかったのである。沖野は宗教談議にありがちな「聾鳳の引倒し（＝自宗教への都合よい取り込み）」を警戒し、学問的態度を保とうとした。

沖野の思想を考察するために、本発表では比較対象として、沖野の娘婿で、クリスチャンでありながら國學院に学んだ関根文之助を取り上げる。関根は、アジア太平洋戦争期に日本のキリスト教を高唱し、大陸進出を「聖戦」と主張したが、戦後は稳健化し、聖書改訳や教育活動に従事するなど軌道修正を図った。彼の歩みは比屋根安定と似通っており、戦後のキリスト教界における自己再定義の典型例といえる。総じて、アジア太平洋戦争期に活動した（狭義の）日本のキリスト教論者たちは、戦後に立場を転換して広義の枠組みに移行した者も多く、その言説や存在は、戦後社会へのソフトランディングに寄与した。こうした可逆的移行の構造は、戦後日本におけるキリスト教の無反省と実利主義を象徴している。沖野はその中でも一貫して冷静な姿勢を保ち、キリスト教と日本思想の関係を客観的に見つめた数少ない論者といえる。沖野自身が晩年、明治学院に寄贈した手稿などの資料が、近年、整理され、順次公開されている。これら新資料を用いて、本発表では、沖野の思想とその背景を明らかにするとともに、彼の文筆活動が後世に与えた影響を考察する。

ジョージ・シャノン・マッキューンと植民地期朝鮮の「信教の自由」

氏名 李省展（イ・ソンジョン）
所属 国際日本文化研究センター

発表者は直近では、植民地期朝鮮における「信教の自由」をテーマに研究を進めてきたが、その研究過程で マッキューン（George Shannon McCune）が象徴的な人物として浮上してきた。「韓国併合」後に起きた最初の朝鮮総督府による大規模な弾圧はキリスト教勢力を対象にしていた。いわゆる 105 人事件（「寺内朝鮮総督暗殺未遂事件」、1911—1912 年）はこれまでキリスト教の進歩的勢力であった新民会や青年学友会との関係で語られることが多かったが、発表者は、ミッションスクール弾圧事件としての性格が強かったとの見解を有している。それは、総督暗殺の首謀者は信聖学校の学生とされ、彼らに拳銃を渡したのが校長であるマッキューンとされたからである。実際、学生・教職員の多くが拘束されたため、学校運営に大きな支障をきたしている。またこの事件は宣教師が殺人にかかわったとされたことから、欧米の世論に大きな反響を呼ぶ世界的なイシューとしての性格を帶びた。J.R.モットは寺内総督邸を訪ね、この事件の解決に向け圧力をかけ、また井深梶之助はこの事件によりアメリカの信頼を日本は失っていると外務大臣に進言していることが本年 1 月に発刊された『井深梶之助日記 大正編』で明らかとなっている。

また 1930 年代に入ると、日中関係の悪化を背景としてミッションスクールに神社参拝が強要されていくことになるが、この件が「信教の自由」の弾圧事件として世界的に注目されるきっかけとなったのが、当時は「東洋のエルサレム」とも称された平壌における崇実学校校長であったマッキューンによる平壌神社参拝拒否事件（1935 年 11 月 14 日）であった。マッキューンは校長職を解任され、このことが契機となり 1937 年 3 月に長老派ミッションスクールは教育事業からの全面撤退にいたった。このように植民地期の初期と末期において「信教の自由」とかかわる重大事件の発端となったのがマッキューンであった。

本研究発表は、マッキューンが両事件においてどのように関わったのか、どのような神学的背景のもとで何を考え、どのように行動したのかをハワイ大学マノア校 Center for Korean Studies の George Shannon McCune コレクションとマッキューンの子息 George McAfee McCune コレクション所収の書簡・報告書類から、またその他の宣教関連資料から明らかにするものである。さらに、いくつかの新資料からこの時期の神社参拝問題におけるミッションの動態についても明らかにしたい。

テアドール・ヘッカーのナチズム批判

氏名 立花健

大阪市立大学大学院西洋史学専修後期博士課程単位取得満期退学

1. 研究の目的 テアドール・ヘッカー（1879-1945）の著作からナチズム批判につながる論点を抜き出して整理し、その論点にジョン・ヘンリー・ニューマンとゼーレン・キルケゴーがどのような影響を与えたかについて考察する。彼のナチズム批判の特徴をヨーロッパ近代思想史の流れの中に位置付ける。

2. 従来の研究と異なる点

ヘッカーの著作の中にニューマン、キルケゴーの影響がどのように現れているかを具体的に指摘したこと。

3. 論旨

①ニューマンのヘッカーへの影響

ヘッカーは、『西欧の父 ウェルギリウス』（1931）において、ウェルギリウス的精神がキリスト受難の「事前準備」であり西欧人の基盤であると位置づけた。これはニューマンの、全ての人間が「良心」を持つとする思想を、異教徒ウェルギリウスを媒介にして表現したものと言える。イエス誕生以前の人物を取り上げることで、人は宗教・宗派にかかわらず「良心」を持つことを鮮明にしようとしたのである。彼が提唱した、信仰と理性と意志をこの順に序列付け生活実践の基準とする「階層主義」は、ニューマンの、信仰を基準にして信仰と科学の統合を目指す思想を定式化したものである。

②キルケゴーのヘッカーへの影響

ヘッカーは『あとがき』（1917）において「教会と権力の同盟はキリストにおける自由の喪失を意味する」として、一次大戦時のドイツ・プロテスタント教会の帝国政府との癒着を批判した。『西欧の父、ウェルギリウスの省察』（1932）において「教会は人種と民族および国家に依存しない」として、人種主義およびナショナリズムに反対する姿勢を明確にして、ハーケンクロイツを「詐欺のシンボル」と書いたために、ナチ政権下で逮捕された。このヘッカーの姿勢は、彼が『ゼーレン・キルケゴー』（1925）において「神の前に立てば、子孫、家族、国家、教会、民族は相対的なものである」と書いていることから分かるように、キルケゴーの「イエスとの同時性」の思想を実践することで獲得されたものである。さらに、ヘッカーは『日記』（1939-1945）において、自分にはヒトラー等の「悪魔」の声を「識別する能力」があると書いた。「イエスとの同時性」に生きることは、イエスに倣って悪魔の誘惑と戦うことでもあった。

③ヘッカー思想の歴史的位置づけ

ヘッカーは、階層主義哲学による信仰の復興を通して、精神的渾沌状態にある西欧社会の危機を乗り越えようとした。その独自性は、「ローマ帝国の再生」を掲げて、渾沌の原因であるナショナリズムを克服する道を提示したことにある。彼のナチズム批判の特徴は、野蛮な行為そのものではなくそのような行為の背景にある、人間中心主義および信仰の国家への従属に見られる、近代初期以来の精神的伝統に注目したことにある。ヘッカー思想は、19世紀以来の信仰復興運動の流れを汲むキリスト教実存主義に属するものである。

北米日系女性キリスト者の強制収容所における活きた宗教と神学

氏名 宮城 献

所属 プリンストン神学大学院

本発表は、北米日系女性キリスト者の第二次世界大戦期における強制収容所の活きた宗教（Lived Religion）・活きた神学（Lived Theology）実践を考察する事を通して、彼女たちの持つ複雑な主体の様態（modality）を明らかにする事を目的とする。

近年の米国キリスト教史研究においては、教会を中心とした宗教機関を中心とした教会史の物語や、白人男性教職者・神学者が解釈、構築してきた教理史の物語ではなく、多様なキリスト者の経験・活動を描く物語への注目が高まっている。その際には、キリスト者の日常的な宗教実践に注目する「活きた宗教（Lived Religion）」という研究アプローチが重要視されてきた。と共に、特権階級に属さないキリスト者の日常的な神学的営みに注目する「活きた神学（Lived Theology）」への研究アプローチも発展してきた。本発表は、こうした近年の米国キリスト教史における研究アプローチに基づき、強制収容所における日系女性キリスト者の「活きた宗教（Lived Religion）・活きた神学（Lived Theology）」を考察する。

また、米国キリスト教史において、宗教とジェンダーを巡る研究は多くなされてきた。例えば、教会活動を通して、女性が性差別の構造下にあって抑圧されてきた事に注目する研究などが挙げられる。もしくは、宗教実践や信仰を通して、女性が家父長社会からの解放へと繋がったケースに注目する研究もなされてきた。それらはつまり、「従属」もしくは「抵抗」する女性宗教者という二元論的な物語を形成してきたということだ。しかし、こういった物語だけでは、その二元論を超えた複雑な女性の主体の様態（modality）を明らかに出来ていない。そのために本発表は、日系女性キリスト者の強制収容所での宗教・神学実践を通して、複雑な主体の様態を明らかにしていく事を目指す。以上の目的を果たすためにも、本研究では、強制収容所において、彼女たちが記した証集やオーラルヒストリー、もしくは彼女たちを記した日系男性教職者や白人米国宣教師の説教や週報を分析する。そうすることで、強制収容所における日系女性キリスト者の抵抗と従属の物語だけに回収されない、宗教的実践と神学的営みに焦点を当てていくのだ。

ファシズム戦争とプロテスタント教会 ～ヴァルド（ワルド）派従軍チャプレンの動向～

氏名 金田俊郎
所属 福岡女学院看護大学

前回発表では、従来ほとんど情報のなかったイタリア・ファシズム体制化のプロテスタント教会の動向について、中世以来の歴史をもつヴァルド派（ワルド派）福音主義教会（以下、ヴァルド派教会）のそれを中心に、1946 年のジョヴァンニ・ミエッジェ Giovanni Miegge 著『ファシズム下のヴァルド派教会 La Chiesa valdese sotto il fascismo』により紹介した。

ヴァルド派教会はファシズム時代を通じて慎重な姿勢を崩さず、表だった抵抗活動はなかったと総括されている。しかしそうした態度の背後には、長い迫害の歴史を「良心の自由 libertà di coscienza」を信念に生き抜いてきた少数派信仰共同体のしたたかな抵抗姿勢が隠されていた。より若い世代の牧師や知識人信徒たちの中には、バロック神学に学びつつ、ファシスト体制に対するより積極的な抵抗姿勢を明確にする人々が現れ、その中には実際にレジスタンス活動に参加する者もいた。こうした姿勢は、同様に少数派であるわが国のキリスト教会が注目すべき事柄であると考える。

ただし、著者ミエッジェはその積極的抵抗姿勢を示したグループに属しており、その視点からの記述である点に注意が必要である。彼らはむしろ少数派であって、ヴァルド派教会全体を代表したものではなかった。その抵抗姿勢は、当時の警察資料を詳細に検証したジョルジョ・ロシャ Giorgio Rochat の研究によって裏付けられているものの、ミエッジェの記述には書かれていない側面もあることにも、注意が必要である。

その側面の一つに、同時期にヴァルド派教会からイタリア軍部隊に派遣されていたいわゆる「従軍チャプレン cappellano militare」の存在がある。彼らの活動の実態はいかなるものであったのか。また彼らを戦場へと送り出した教会の意向とはどのようなものであったのか。特に、同じヴァルド派教会内で、レジスタンス活動に参加したミエッジェたちのグループと、従軍チャプレンたちとの関係はどのようなものであったのか、等が問題となるであろう。そこで今回は、従軍チャプレンについての情報を集め、そこに現れている思想や意識について考察することとした。

レジスタンス的勝利で締めくくられるミエッジェの著作には、ほぼ同時期の「シュツットガルト責任告白」に相当するような意識の自覚は感じられない。またパルチザンとして抵抗活動に参加した青年信徒たちが行使せざるを得なかつたはずの具体的な暴力や殺人行為についての記述もほとんど見られない。こうした問題に対し、ミエッジェとは異なる立場に立ちつつ、戦場の牧会者として働いた従軍チャプレンは、どのように考え、行動したのか。この側面の情報は、ファシズム体制下の戦争に対峙せざるを得なかつたヴァルド派教会の信仰とその態度の全体像を把握するため、不可欠な要素であると思われる。

現時点で使用できている資料は、前回に引き続き、基本的にヴァルド派福音主義教会の出版物や web 上で探索可能な情報に限られており、課題である一次資料の探索までには至っていないが、可能な限り多くの情報を集めて考察を深めたい。

チベット仏教世界とキリスト教
—清代外藩モンゴルのオルドスにおけるモンゴル人キリスト教徒の
賦役免除問題を事例に—

氏名 ハスゴワ（哈斯高娃）
所属 神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート研究員

アロー戦争の結果、天津条約（1858年）と北京条約（1860年）が締結され、中国におけるキリスト教の信仰と布教が再び合法化された。中国本土の各省では、キリスト教徒が民間宗教祭事費用の負担を拒否したことによって、非キリスト教徒との間で金銭的なトラブルが多発していた。咸豊11（1862）年、フランス領事の交渉によって、キリスト教徒の民間宗教祭事費用の分担を免除させる規定が定められた。ただし、チベット仏教が隅々まで浸透していた外藩モンゴルでは、信者に仏教祭事費用を負担させることができなかった。そこでスクート会（モンゴル教区を管理していたベルギーのカトリック教会）は、民間宗教祭事費用免除の規定を変えて、モンゴル人キリスト教徒が負担すべき国家的な賦役の一部を免除させることを要求した。先行研究では、モンゴル人キリスト教徒の賦役免除は、盟旗側の権益を損なったため摩擦が起きたとしか論じられていない。本研究では、清代外藩モンゴルの一地域であるオルドス（正式名称：伊克昭盟）を研究対象地域とし、清王朝中央の漢文檔案（公文書）史料と地方のモンゴル文檔案史料とを利用して当該規定の実行実態を考察し、チベット仏教世界におけるキリスト教問題の特徴を明らかにしたい。

外藩モンゴルでは盟旗制度と呼ばれる行政且つ軍事組織（盟←旗→ソム）が形成されると共に、身分制度による統治構造も併存していた。原則として、ソムに属する箭丁は清朝皇帝に対して賦役を負担し、貴族の領民である隨丁は領主に対して賦役を負担する義務がある。オルドスの盟長ジャナガルディはモンゴル人キリスト教徒の賦役を免除させる要求を認めだが、実際のところ、旗側は賦役の負担者を確保するために、モンゴル人キリスト教徒の転出に反対し続けた。そのために旗側と教会側がモンゴル人を奪い合うトラブルが発生していたが、結局、民間宗教祭事費用免除の規定がそのまま適用されることはなかった。従って、外藩モンゴルのオルドスでは、チベット仏教の寺院とキリスト教の教会との間で宗教上または経済上の摩擦自体はあまり見られなかつたことを明らかにできる。

一方、オルドスと隣接する内属モンゴルの帰化城トウメト2旗は、清朝皇帝の直轄地であり、漢人移民の流入が早かつたため、当該地域に定住した漢人キリスト教徒が民間宗教祭事の出費を負担せず、非キリスト教徒との間でトラブルとなつた事例が見られる。しかし、オルドス側は漢人移民の宗教的な祭事の開催を許可しなかつたため、オルドス領内では漢人キリスト教徒が民間宗教の出費の支払いを拒否したことによるトラブルの事例もほぼ見られないことを、本研究で明らかにできる。

正教会における説教観に関する一証言の考察

氏名 近藤喜重郎

所属 東海大学

1. 研究の目的または研究で明らかにすること

本発表は、正教会における説教観はいかなるものか、という問い合わせを明らかにすることを目指す研究の一部である。

2. 従来の研究と異なる点（考察の視点・新史料の利用など）

説教とは何か。新教諸派では礼拝に必須の要素として重視されるが、正教会ではどうか。発表者は以前、ロシア革命後に亡命した人々の、説教に関する次の趣旨の文章を読んだことがある。すなわち、礼拝の中では司祭の個人的な即興演説を聞かせるより、多くの人の心に響いてきた聖人伝を読み聞かせたほうが良い、というのだ。こう聞くと、正教会では説教を軽視しているように思われる。

他方で、現モスクワ及び全ルーシの総主教キリルは、司祭の説教が教会生活だけでなく、国民生活においても、いかに大事であるか、を司牧者の教育の意義と合わせて繰り返し説いている。彼の話を聞くと、正教会では礼拝中の司牧者の言葉を重視しているからこそ、「説教」の名において司祭が時局や聖書・キリスト教に関する個人的な意見や信条を、教父の教えや聖人の教え、聖書の教え、使徒の教え、キリストの教えと混在させて語ることを「即興演説」として厳しく戒めたのであろう、との推定も成り立つ。

こうした、正教会における説教観について従来、どの程度明らかにされているのだろうか。少なくとも、『キリスト教史学』の中で取り上げられた、という話を発表者は知らない。

本発表では、アントニイ・フラポヴィツキイ（Антоний Храповицкий, 1863.3.17(29)-1936.8.10）著「教会の説教に対して単に教会の教えを伝えるだけのものとみなす視座は正しいのか Правилен ли взгляд на церковную проповедь как только на передачу учения церкви」（1887年）と「一般信徒に対する説教について О проповеди мирян」（1888年）を取り上げる。

アントニイは、1918年、革命下のロシア正教会で、モスクワ及び全ルーシの総主教の選挙が200年ぶりに行なわれるに際し、3分の2以上の公会議員の支持を集めた高位聖職者である。結局は籤引きにより総主教に選出されることではなく、それに次ぎ、かつそれより歴史あるキエフ府主教に任せられるが、内戦の中、祖国を離れることを強いられる。

上の2論稿は、2007年にモスクワ総主教教会公認で刊行された著作集の第一部に収録された。もともと個別に執筆され、発表されたものであるが、モスクワ総主教教会は、彼の著作集の第一部に「司牧者及び司牧者であることについて О пастыре и пастырстве」との表題を付け、その中に上の論稿を含めたのである。それは、以前からよく知られたアントニイの学位論文や「キリスト教カテキズムの試み」、様々な聖書神学、聖霊論、教会論、社会論などより前に配置されている。正教会において説教観を述べた論考、高徳の主教による史的証言として今のロシア正教会でも一定の価値を認められていることが察せられる次第である。

なお、本発表で用いる引用文は、上述の著作集に転載された文章の私訳である。

コプト正教会によるサブサハラのアフリカにおける宣教活動 —南アフリカ共和国の事例を通して

氏名 三代川寛子

所属 京都大学

コプト正教会は、ムスリムが大多数を占めるエジプトを主要な地理的拠点としてきたことから、歴史上、対外的な宣教活動の経験が乏しかった。また、20世紀初頭に提唱されたエジプト・ナショナリズムに基づき、自らを「エジプト人の教会」とみなす傾向が強い。しかし、こうした歴史的背景とは裏腹に、コプト正教会は20世紀半ばごろから、それまでは歴史的に関係の薄かったサブサハラのアフリカ諸国で宣教活動を行うようになっており、南アフリカでは早くも1940年代にはコプト正教会建設の試みがなされている。その後アパルトヘイト政策により中断したが、1994年に同政策が撤廃されると、コプト正教会は南アフリカでの宣教活動を再開した。現在、ヨハネスブルグには南アフリカ司教座が設けられ、およそ15,000名の信徒を獲得していると推測される。

これまでの文献調査により、コプト正教会のサブサハラのアフリカ宣教は、アフリカ諸国におけるパン・アフリカ主義運動およびアフリカ独立教会運動への対応として始まったことが明らかになっている。こうしたパン・アフリカ主義者およびアフリカ独立教会の指導者たちは、コプト正教会を、植民地支配および人種主義に手を染めていない「アフリカ土着の教会」とみなし、アフリカ人としてのアイデンティティとキリスト教の信仰を両立させる存在としてコプト正教会に注目したのであった。すなわち、コプト正教会のサブサハラのアフリカへの進出は、同教会が積極的に対外宣教活動に乗り出したというよりはむしろ、20世紀前半から半ばにかけての時期にアフリカ諸国のパン・アフリカ主義者たちの側がコプト正教会との関係構築に向けて働きかけたことを契機として始まったと言えるのである。

「アフリカの連帯」が叫ばれ大きな意味と影響力を持った独立運動の時代から60年以上が経過した現在、このスローガンが持つ意味は変化していると思われるが、現在も白人・黒人間の人種差別が深刻な南アフリカにおいて、コプト正教会にはどのような役割が期待されているのだろうか。また、それはコプト正教会側の「エジプトの教会」という自己認識とどのような関係にあるのだろうか。本発表では、南アフリカにおける現地調査の成果をもとに、これらの問いを検証する。

キリスト時代のイエズス会日本宣教と「天狗」 —「悪魔」概念の導入と受容をめぐる包括的考察—

氏名 メナチェ・ダリオ・アンドレス

所属 京都大学

周知のようにイエズス会の日本宣教はイエズス会士フランシスコ・ザビエルの来日（1549年）に始まる。宣教の初期、ザビエルは日本人の世界観にキリスト教を適応させることを試みたものの、日本の言語・宗教に対する理解不足も相俟って、その努力は報われずに終わった。そこで以後の宣教師たちは、元の意味を保ちつつも日本人に親しまれる形で教義を伝える方法を洗練させていくことになる。ところで、キリスト教の伝播に関しては従来、「デウス（Deus 神）」、「パライソ（Paraiso 天国）」、「パツショ（Passio 受難）」などの翻訳語が注目されてきた（平岡, 2008；小川, 2012；中砂, 2020）。また、「悪魔」と、翻訳語と「天狗」との関係についても、すでに一定の検討がなされている（米井, 1998；筒井, 2006；呂, 2025）。本研究は、こうした先行研究を踏まえつつ、史料に現れる「悪魔」概念の意味の連続性や変容に着目し、より包括的に検討を加えることを試みるものである。

日本において、悪魔という存在は「天狗」として翻訳され、宣教活動を妨げる出来事や人物の非難、あるいは仏教をはじめとする在来の宗教を「虚偽や迷信」と見なすためなど、さまざまな文脈で用いられた。そして、このような在来宗教の「悪魔化」は、宣教師たちがヨーロッパのイエズス会に送った書簡を通じて広まり、日本のイエズス会神学校で学んだ日本人にも教理書の翻訳を通して伝えられていた。さらに、教化的な目的のもと日本人信徒に向けて出版された『サントスの御作業』（1591年、加津佐刊）をはじめとする、いわゆるキリストian版においても登場人物を惑わす悪魔たちが天狗の姿で描かれていることが窺える。そこで、本発表においては16世紀後半に展開されたイエズス会の宣教で、悪魔という概念がどのように日本へ導入されたのかを分析し、宣教言説におけるその機能を明らかにするとともに、現地の人々にいかに受容されたかを検討する。具体的には、以下の問いを軸に考察を進めたい。（1）なぜ日本において悪魔の概念を導入する必要があったのか、（2）この概念と天狗との間にはどのような類似点・相違点があるのか。（3）そして、これらを検討するに際して、従来は必ずしも十分に注目されてこなかった次の問題点にも光をあてたい。すなわち、「天狗」としての悪魔という概念が、当時のキリストianの間にどの程度浸透していたのか、またどのような形で受け入れられていたのか、という点である。

本研究では、これらの問い合わせるために答えるため、イエズス会士による書簡、日本語に翻訳された教理書や物語、さらに先行研究ではあまり用いられてこなかった迫害下のキリストian共同体宛の文書や「ころび証文」といった複数の歴史資料を分析の対象とする。これにより、キリストian時代から迫害期に至るまでの「天狗」としての悪魔の連続性と断絶を包括的に把握し、宗教導入という複雑な文化交流過程における翻訳の有効性と限界の理解を深めることを目指す。

文献：平岡隆二「イエズス会の日本布教戦略と宇宙論 好奇と理性、デウスの存在証明、パライソの場所」（『長崎歴史文化博物館研究紀要』2008年）／小川俊輔「九州地方における「天国」の受容史—宗教差、地域差、場面差—」（『日本語の研究』2012年）／中砂明徳「天主と耶蘇—明末における受難のナラティブ」（『宣教と適応—グローバル・ミッションの近世』名古屋大学出版会、2020年）／米井力也『キリストianの文学—殉教をうながす声』（平凡社、1998年）／筒井早苗「『サントスのご作業』における「天狗」」（『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』2006年）／呂雅瓊「善と惡の葛藤—十六、七世紀の日本と中国におけるルキフェル説話の展開」（『江戸文化に拓くキリストian表象—娯楽・科学・思想』三弥井書店、2025年）

幕末・維新期における共通体験と「敗者」の入信過程 —旧奥羽越列藩同盟諸藩出身キリスト者によるつながりとひろがりの分析—

氏名 一色哲

所属 帝京科学大学

東北地方には教会の数こそ多くないが、フィールドワークを通して出会うキリスト者たちは個性的であり、教会を取り巻く人々の姿にも独自の気質がみられる。こうした地域、すなわち東北や新潟は、近代日本において長らく「周縁」あるいは「辺境」とされてきた。その出発点には、幕末・維新期の約 500 日にわたる戊辰戦争において甚大な被害と「敗北」の経験をこうむったという共通体験がある。このような歴史的体験が地域におけるキリスト教の受容とその特質に影響を及ぼしているのではないか、というのが筆者の仮説である。

戊辰戦争に際して奥羽越列藩同盟を構成した東北諸藩の出身者のなかには、明治期以降の日本キリスト教界を代表する人物が多く輩出された。たとえば本多庸一（弘前）、井深梶之助（会津）といった指導者に加え、新島八重や井深八重（会津）、羽仁もと子（八戸）、山室機恵子（花巻）など、女性信徒においても際立った存在が見られる。また、戊辰戦争の最終局面となった箱館（現・函館）では、戦前からロシア正教会が布教しており、同地に滞在していた旧仙台藩士たちによってその信仰が東北へ伝えられた経緯がある。静岡バンドの中心的メンバーであった今井信郎も、箱館戦争からの帰還兵であった。

これら維新の「敗者」となった諸藩は、戊辰戦争後、明治新政府から懲罰的な扱いを受けた。特に旧会津藩は領地を没収され、青森県の斗南に強制移住させられたのはその象徴的な例である。また、新潟県の長岡や会津若松、函館といった都市は、戦火によって市街地が徹底的に焼き払われ、住民は両軍からの略奪にもさらされた。他の地域においても、戊辰戦後の復興は急務であったが、新政府による支援はなく、荒廃したまま長らく放置された。

こうして苦難の状況下にあった地域でキリスト教が受容された背景には、単に「文明の宗教」への憧れや倫理への傾倒だけでなく、生活の不安や苦難からの脱却、そして救済を求める切実な心情があったと推察される。しかし当時の信徒たちはほとんど記録を残しておらず、入信動機を直接たどることは困難である。ゆえに本研究では、個々の信徒や伝道者のキリスト教と出会いと入信過程を追うことでその目的を達成したいと考えている。

従来の日本キリスト教史研究は、都道府県単位の調査や、教団・教派による「地方伝道史」が中心であったが、本研究はそうした枠組みを越境し、戊辰戦争という「内戦」の敗者たちがどのように信仰を獲得し、それを支えに歩んだかを描くものである。これは近代日本におけるキリスト教受容の動機を問い合わせ試みでもあり、同時に発表者自身がこれまで進めてきた南島地域におけるキリスト教史研究とも呼応する視座を有している。

明治中期の群馬県におけるキリスト教婦人会と社会 －「吾妻婦人会」を事例として－

氏名 服部玲子

群馬県では明治 20 年前後にキリスト教や仏教などの宗教、あるいは教員を基盤としたさまざまな婦人団体が設立された。「吾妻婦人会」はその一つで、明治 21(1888)年に吾妻郡のキリスト教徒が中心となって設立した団体である。本発表では同会の創立から 4 年間の記録からみえる活動の様相と社会における位置づけを考察する。

明治前期から中期にかけての群馬県は、養蚕・製糸業の発展の中で自由民権運動がおこり、キリスト教が広く浸透した。そしてそれらを担ったのが地域の富農富商といわれる有力者であった。吾妻郡の山口六平もその一人で、地域の近代化に尽力する中でキリスト教徒となり、地元の青年・婦人たちの啓蒙を図るために「吾妻青年会」と「吾妻婦人会」の設立を主導した。

これまで吾妻婦人会については、千野陽一が『近代日本婦人教育史：体制内婦人団体の形成過程を中心に』（1979 年）において、キリスト教の影響下に成立した学習中心の婦人会の典型であると位置づけている。また郷土史家の金井幸佐久は『吾妻郡キリスト教史』（2003 年）において同会の活動を詳述し、吾妻青年会との関係についても言及している。

しかし旧社会通念が残る地方農村小都市で、キリスト教徒が設立した婦人会が地域社会の中でどのように受け止められ、運営されたかについては十分に言及されていない。また同婦人会が活動した時期は、県下で拡大するキリスト教に対抗するために仏教（真宗）が婦人会という手段を用いて攻勢を強め、他方ではキリスト教徒が中心となって活動した廃娼運動の高揚期と重なっているが、こうした社会情勢に婦人会がどのように向き合ったかについては明らかにされていない。

そこで創立期（明治 21(1888)年 2 月～明治 25(1892)年 1 月）を記録した史料『吾妻婦人会記録』を精査し、同時期の周辺資料と照らし合わせることで、当時の社会における吾妻婦人会の姿を鮮明化することを試みた。

『吾妻婦人会記録』は婦人会創立集会の日から 4 年間の開催毎の活動を記録している。そこには地域の婦人に学びの場を提供するために試行錯誤した様子や、当時の婦人に求められた意識改革の一端を演説招聘講師の演題から読み取ることができる。しかし社会的事象やそれに対する感想は一切記録されていないので、当時の社会動向への直接的な反応を知ることができなかった。そのため、それを補う資料として仏教側婦人会の機関誌『婦人教育雑誌』や廃娼運動を担った上毛青年連合会の機関誌『上毛之青年』などを参照しつつ、吾妻婦人会の社会への反応を俯瞰的に探った。

鈴木大拙夫人ビアトリスとキリスト教宣教師

氏名 日沖直子
所属 名古屋学院大学

禅思想家、鈴木大拙（1870—1966）の妻、ビアトリス（旧姓 Erskine Lane, 1875—1939）は、コロンビア大学大学院の修士号をもつアメリカ人女性で、大谷大学等で教鞭をとり、夫とともに英文雑誌 *The Eastern Buddhist* の共同編集者をつとめただけでなく、大拙の 1930 年代の英文著作にもおおいに貢献したと考えられる人物である。本発表は、この鈴木ビアトリスとキリスト教宣教師との関係、特に「同志社の宝」と称される、ミス・デントンこと、メリー・フローレンス・デントン（1857—1947）との交わりに注目し、デントンのサロンに集まる国際的な宗教者・研究者たちと鈴木夫妻の交流を明らかにし、その意義を考察する。

デントンに関する資料として、決定版とも言えるフランシス・B・クラップによる伝記（邦訳「ミス・デントン」同志社女子大学・同志社同窓会、2007）には、鈴木ビアトリスに関する言及は見当たらない。ただ 1939 年、デントンが肺炎で入院した際の記述で、見舞客の中に「鈴木博士」が登場しており、これは大拙だと考えて良いであろう。というのも、近年新たに翻刻が公開されているビアトリスの日記には（『松ヶ岡文庫研究年報』Nos. 37—39）1920 年代半ば以降、ビアトリスとデントンの間の親しい交わりがあり、それが家族ぐるみの交際であったことが明白に記されるからである。ビアトリスはデントン・ハウスを頻繁に訪れて本や雑誌を借り出し、また同志社関係者のみならず、聖公会の宣教師も交えた在留外国人の集まり“Recreation Club”に定期的に参加、時には養子アラン（勝）も共にパーティを楽しんでいる。鈴木夫妻がデントン・ハウスで大使館関係者や海外からの研究者と出会い、親交を深めていくきっかけになったこともままあったようで、ビアトリスが 1930 年代に設立した動物保護施設の支援者フランシス・バーネット（1884—1957）や、アジア宗教研究者で *Eastern Buddhist* 誌の寄稿者でもあるケネス・J・ソーンダース（1884—1937）と夫妻が出会ったのも、宣教師ネットワークを介したことだったようである。聖公会女性宣教師の集まりではビアトリスが「仏教クラス」を開き、大拙がそこで仏教を論じたこと也有った。さらに、アランが高野山中学を卒業後同志社に進学した際は、デントンの奨めがあったことも、日記に記されている。

日記とは、あくまで個人的かつ主観的なものである。それを前提とした上で、当発表では、大拙の英文日記や、デントン関係の資料、聖公会文書館史料等とビアトリス日記をクロス・リファレンスすることによって、1920 年代後半から 30 年代にかけての京都在留宣教師ネットワークの動きの一端および、彼らと鈴木夫妻との関わりに光を当てたい。

アンドレ・ベルソールとパリ外国宣教会の在日宣教師

氏名 山梨淳

江戸時代に途絶えた日本のカトリック宣教は、幕末に来日を果たしたパリ外国宣教会によって再開された。日本における同会の宣教活動は、宣教師自身によって西洋のカトリック世界に報告されていたが、また日本を訪れた旅行者によってもその姿が伝えられている。

近代日本を訪れたフランス人旅行者の中で、滞日中、パリ外国宣教会の宣教師と親しく接していた人物にアンドレ・ベルソール (André Bellessort 1866–1942) がいる。ベルソールは一九世紀末から詩や文学批評、旅行記など様々なジャンルの作品を執筆した文学者で、一九三五年にアカデミー・フランセーズの会員に選出されている。

ベルソールは、一八九七年と一九一四年の二回にわたって来日している。彼の日本社会論・滞在記は、雑誌『両世界評論』に連載された後、一九〇二年に『日本旅行－日本社会』、一九〇六年に『日本の昼と夜』(邦訳『明治滞在日記』)、一九一八年に『新しい日本』が単行本として刊行された。また、日本のキリストン時代に関心を抱いた彼は、フランシスコ・ザビエルの伝記 (『聖フランシスコ・ザビエル－インド・日本の使徒』一九一八年) を執筆している。

本発表は、ベルソールとパリ外国宣教会の宣教師らとの関係に注目し、彼の宣教師観を明らかにすることを目的としている。カトリック信者の彼は、来日時、各地でパリ外国宣教会の宣教師と交流し、また宣教師の著作にも親しんでいた。彼の著作では、宣教師との交流が記され、宣教師の著作が参照されている。

ベルソールは現在ほぼ忘れられた文学者であり、彼を取り上げた研究は少なく、今まで彼とカトリック宣教師の関係が注目される機会もなかった。しかし、ベルソールの著作は同時代の読者に広く読まれ、ほかならぬ宣教師からも評価されたものだけに、彼の宣教師観を明らかにすることは、カトリック教会史研究のうえで意義を持つものと考える。

この発表ではベルソールが一九三一年に『両世界評論』に発表した「私の見たところの私たちの宣教師たち」に注目する。パリ郊外で催された植民地博覧会を機縁に発表されたこの文章で、彼は過去に出会った日本の宣教師たちの思い出を語っている。この事実は、ベルソールが後年に至るまで、日本での宣教師との交流を貴重な思い出として抱き続けていたことを物語っている。

パウロ・マレラ駐日教皇使節による日中戦争に関する最初の報告書
(1937年9月20日付)について

氏名 三好千春
所属 南山大学人文学部キリスト教学科

報告者は、これまで日本のカトリック教会（以後、教会と略記）と日中戦争について、教会の戦争観、反共産主義言説、日中戦争認識などの角度から分析と考察を重ねてきた。その結果、教会が19世紀にフランスを中心にヨーロッパで生まれた戦争には「福利」があるとして肯定する「戦争の神学」の影響を受けていたと思われること、第一次世界大戦でフランス人宣教師たちが応召して兵士として戦場に赴いたことを愛国の業として肯定し模範とするメンタリティがあったこと、教会の反共産主義の力点が、1920年代までの経済政策、労働者救済策から、1930年代になると共産主義が持つ無神論の側面に移っていき、それによる共産主義の「悪魔化」が起こったと考えられること、そして、教会は日中戦争を「防共の聖戦」とみなし、正戦論を使って正当化していることなどが明らかになった。

これらを踏まえて、現在、報告者は日中戦争時期の教会を指導していた人々（司教、司祭、一部のカトリックジャーナリストなど）の日中戦争観やその協力の在り方に関する研究を行っているが、本報告は、教会とローマ教皇庁双方に大きな影響力を持っていましたパウロ・マレラ第4代駐日教皇使節に焦点を当てる。

パウロ・マレラ教皇使節（1895～1984年）は、1933年10月に大司教（ドクレア名義大司教）に叙階されて同年12月に日本に着任し、1949年2月に離日した人物で、土井辰雄神父（1938年、東京大司教に叙階）や田口芳五郎神父（1942年、大阪司教に叙階）はマレラの秘書を務め、彼と深く結びついていた。またマレラは、フマゾーニ=ビオンディ布教聖省長官と太いパイプを持ち、神社参拝をめぐっては布教聖省に強い影響力を及ぼした。このように、教会および布教聖省に影響力のある人物が日中戦争をどのように認識し、いかなる内容を布教聖省に報告していたかを分析することは、教会の日中戦争への対応だけでなく、教皇庁の対日・対中政策を考察する上でも重要と思われる。

そこで、本発表では、これまで使用されてこなかった布教聖省文書館（L'Archivio Storico de Propaganda Fide）に所蔵されているマレラ教皇使節の報告書を使って、彼が日中戦争について何を伝えていたか、その内容を分析する。なお、日中戦争が始まった1937年にマレラが布教聖省に送った日中戦争に関する報告書は3通あるが、今回は、1937年9月20日付の日中戦争に関する最初の報告書（Prot.N.464/37）に焦点を当てる。



龍谷大学周辺ランチマップ

②
③

警察学校

☆本学



⑧

⑩
⑪
⑫

①明養軒

昔ながらの優しい街中華！
あんかけ五目ラーメンがおすすめ！

歩 5分 11:30~20:30 休 月・木・金

②ら～麺処 克享

味噌ラーメンの名店！
炙りチャーシューが美味しい！

歩 4分 11:00~14:30
17:30~21:00 休 土

③新華

龍大生の行きつけ中華！
辛いけど美味しい！激辛麻婆！

歩 1分 11:00~14:00
17:00~21:30 休 日

④BOO

校内のベンチで美味しいパン！
カリッカリの絶品カレーパン！

歩 1分 8:00~19:00 休 日

⑤第一旭 竜谷大横店

京都の人気ラーメン店の支店！
超王道の醤油ラーメン！

歩 1分 11:00~23:00 休 水

⑥湘見・湖南料理

メニューも全て中国語の超本格中華！
本場の辛味スパイスを堪能！

歩 2分 11:00~15:00
17:30~21:30 休 火

⑦インド・ネパール料理

ソニヤ 竹田久保店
優しいナンとカレーの風味！
カレーの辛さも調整可能！

歩 5分 11:00~15:00
17:00~22:30 休

⑧天えい

龍大で昼ご飯といえばここ！
絶品の天ぷらを御賞味あれ！

歩 4分 11:30~15:00 休 日

⑨中華園

中国人が作る本格中華！
エビチリとよだれ鶏の定食がおすすめ！

歩 10分 11:00~22:00 休

⑩無名小吃

質も量も本場を再現！？
エビチャーハンが優しい味で絶品！

歩 5分 8:30~15:00
16:30~21:30 休 火

⑪きりん亭

昔ながらの京都のおうどん！
冷やし・ざるも美味しい！

歩 10分 11:00~15:00
17:00~20:00 休 日

⑫うずら

カフェのマスターがこだわるカレー！
鹿のメンチカツが絶品！

歩 10分 9:00~18:30 休 日

キリスト教史学会 第76回大会 研究発表要旨集

発行日 2025年9月12日

発行者 岩野祐介

キリスト教史学会大会実行委員会委員

石川雄一・小川早百合・朱海燕・田中恵・

狭間芳樹・服部直美・松谷暉介・三好千春

発行所 キリスト教史学会

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F

毎日学術フォーラム内 キリスト教史学会事務局

E-mail shsc@accelight.co.jp

URL <http://shsc.jp/>